

書評

Ian Haywood, *The Rise of Victorian Caricature*
(Cham, Switzerland: Palgrave Macmillan, 2020)



木島 菜菜子 (京都ノートルダム女子大学)

本書は、1830年代から1840年代半ばにかけて制作され様々な定期刊行物に掲載されたカリカチュアの多様性と意義を再評価するものである。これまでほとんど評価されてこなかった作家の作品も発掘しながら、発表媒体の特徴を分析して読者層の検討を加えつつ、多くの図版を丁寧に読み解く著者Haywoodの議論は、読みどころのあるものだ。

本書は著者自身も述べるように、カリカチュアの「黄金時代」とも呼ばれる時代を築いたJames Gillray、George Cruikshank、Thomas Rowlandsonらの作品に焦点を当て、その政治的インパクトやイデオロギーの複雑さを論じた2013年の著作*Romanticism and Caricature*の続編と言えるものである。この前著では時代区分としてはロマン主義の終焉までを扱い、1830年代になって「ブルジョワ的なイデオロギーが政治や経済に浸透し、ヴィクトリア朝的な価値観が影響力を持ち、さらに挿絵の入った定期刊行物が流行したこと」などが、それまで70年近くに及び自由闊達に制作された風刺画の旺盛が終焉を迎えたことと関係していると論じていた(141)。その一方で、最後に第一次選挙法改正期について一章を割き、本書評が取り上げる*The Rise of Victorian Caricature*でより詳細に扱うこととなるCharles Jameson Grantが制作したとみられる作品などを取り上げ、1830年代のカリカチュアには独自の特徴があると述べるなど、すでにこの前著の議論の中でも本書のテーマの方向性が探られていた。

本書では、取り上げる図版を数点に絞ってその精読を実践した前著とは異なり、図版の精読も多分に行いながらも、第一次選挙法改正の議論が発点となってカリカチュアに革新がもたらされ、より広い読者層を獲得し

ていく過程を意識した議論が展開されている。本書が主に依拠した先行研究として、カリカチュアの読者層の拡大と定期刊物との関係を初めて調査したBrian Maidmentが挙げられるが、大局的にはイギリスにおける労働者階級の成立過程に関心のある本書の著者Haywoodは、よりカリカチュアの政治性に焦点を当てている(4)。(なお本稿では、原著で“viewer”と表現されるカリカチュアの鑑賞者について、図像を読むという意味において“reader”という語を著者が用いている箇所もあるため、統一して「読者」という日本語をあてたことをここで断っておきたい。)

さて、本書は6章から成り、カリカチュアの果たした政治的、文化的影響を考察する第1章、Robert Seymour (1798-1836) の作品に主に着目し1830年から32年にかけて描かれたカリカチュアと政治との関わりを検証した第2章、これまでほとんど知られてこなかったCharles Jameson Grantの仕事を紹介した第3章、急進的な新聞に掲載された選挙法改正議論に関連する図版を論じた第4章、チャーティスト運動を描いたカリカチュアを取り上げた第5章、ヴィクトリア女王を描いたカリカチュアを取り上げた第6章で構成されている。以下、各章ごとの議論を紹介する。

第1章は、ギヤスケルの小説『メアリー・バートン』(*Mary Barton*, 1848)の中で、メアリーの恋人のハリー・カーソンが描いた1枚のカリカチュアへの言及から始まる(この点および第5章の内容から、本書はチャーティスト運動と文学の関係を調査した著者の2016年の論文“The Literature of Chartism”の延長線上にあることもわかる)。カーソンが軽い気持ちで描いた、痩せ細ってボロボロの服を身に纏った工場労働者たちの絵は、搾取を訴えつつも聞き入れられない労働者たち本人の目に留まり、カーソン本人を暗殺する計画へと結びつく。内輪の仲間たちの間では害のない風刺が、公にされ被害者の目に入ることによって、その製作者の命を脅かすように跳ね返ってくるのである。著者Haywoodは、これは19世紀における労働者と政治的なカリカチュアとの関係を象徴しており、ヴィクトリア朝の政治と印刷文化における風刺画の影響力の大きさを証拠立てたものだと述べる(2)。

これまで一般的に、1830年代および40年代初頭の風刺を掲載した印刷物は、1841年創刊の『パンチ』(*Punch*)の先駆者としての認識しかなされて

こなかった(4)。しかし著者の議論によって、『パンチ』がやがて市場をほぼ独占することになる土壌が、いかに存在感のある数多の新聞や雑誌によって形成されていったかがわかる。

そこで活躍したのがRobert SeymourとCharles Jameson Grantであった。この二人は、彩色を施した高価な石版画を制作する一方で、遥かに効率的で安価な木版画も数多く制作し急進的な定期刊行物に発表した。安価とはいえ彼らが想定した読者は、文字や視覚的な風刺素材を読み解くことができる少なくとも「平均的な知識」を持った読者層である。その点において、彼らは民主的なカリカチュア文化の形成期における最初の画家たちであったと言えるのである(7)。

上記を踏まえて第2章では、Robert Seymourに焦点が当てられる。近年まで、第一次選挙法の改正とともに政治性の強いカリカチュアはその使命を終え、下火となったというのが通説であった。Haywoodはサッカーの*Critical Papers on Art*からの言葉を引用しながら、『パンチ』が誕生するまでのカリカチュアは、歯を抜かれて大人しく無害になった、家庭的なコミック・アート的一种という認識が一般的だったと述べる(18)。

しかし実際には、『パンチ』創刊までの10年間、カリカチュアはリベラルで安価な急進的定期刊行物とともに、それまでに前例のない形で反支配勢力、反政府勢力の発信をする場となっていた。この時代のカリカチュアの発展について特に重要な2点は、まず選挙法改正以後のホイッグ党への幻滅をはじめとして、政治の失敗を次々と視覚化し、それが定期刊行物に掲載されながら一つの新しい方向性を生み出したという点であり、また、それが安価に販売されることによって、初めて階級の低い人々にも入手可能になったという点である(19)。

第一次選挙法改正の議論が高まる中で、公の政治の議論の場から労働者階級は排除されていることが明らかとなり、この時期カリカチュアは、社会的そして政治的な不正義を見張るという新しい使命を見出ししていく(50)。質の高いカラー図版を掲載する月刊雑誌*Looking Glass*(1830~36年刊行)の人気を支えたRobert Seymourは、1831年に創刊され印紙税に対抗して1ペニーで発売された週刊誌*Figaro in London*にも作品を掲載し、この安価な媒体で読者層を拡大した(55; 62)。この雑誌の編集者は、ほぼ10年後に『パ

ンチ』創刊に携わることになる Gilbert a' Beckett と Henry Mayhew であった。この雑誌の最も重要な特徴は、労働者階級と中流階級双方の読者層を得、階級を超えた政治風刺の場となったことである (63)。

Figaro in London に掲載されたカリカチュアが、サッカーの記憶するようなお行儀の良いものではなく、いかに辛辣でラディカルなものであったかを著者は様々な具体例を示しながら論じる (77)。そして、その中心にいた「カリカチュアのシェイクスピア」とも呼ばれた Seymour の、イギリスの風刺文学の伝統を受け継ぎながらそれを独自に発展させた様々な手法を紹介している (82; 69)。

Seymour に次いで、1830年代の風刺画家として最も精力的な活動をしたのが Grant であった。これまで歴史上ほとんど注目を浴びてこなかったこの Grant に一章を割いているのが第3章である。Grant は複数の雑誌で活躍したが、中でも顕著なのが *Looking Glass* の安価版と言える *Every Body's Album* や、さらに廉価で挑発的な内容を木版画で掲載した *Political Drama* であった (106; 116)。ここでも著者は、Cruikshank の作品を模しながら独自のテイストを加えた Grant の作品の一例や、新救貧法の影響をグロテスクに戯画化した作品、1840年代にかけてのホイッグ政権の痛烈なカリカチュアを読み解いてみせる (121; 137; 145)。

1836年に *Figaro in London* が掲載した「改革ハリケーン」と題した風刺画を代表として、1840年代初頭までに出版された数々のラディカルな新聞や雑誌、その中のカリカチュアを取り上げたのが第4章である。『パンチ』や『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』(1842年創刊)へと繋がるこれらの刊行物が描き出した政権批判は、権力者に対し、改革を求めるものの目から隠れることはできないと知らせるものでもあった (164)。Grant が活躍したこれらの雑誌はいずれ『パンチ』がライバルとなりうるものではあったが、3ペンスと高額でミドルクラスをターゲットにし、いわゆるリスベクタブルな読者を想定した『パンチ』には、Grant の作品に匹敵するような辛辣な内容は見られない (169)。

この章の著者の議論で面白いのは、カリカチュアにおける食事の図像の分析である。これまでもカリカチュアにおいて「食べる」という行為は、異化されて現実社会とイデオロギーとの衝突の象徴などとして描かれてき

たが、1830年代においては特に飢餓に苦しむ貧民と、教会や当局の飽食できる偽善者たちとの間のあからさまなコントラストをなす図像の中に多く描かれた(181)。しかしここで複雑なのは、そうしたカリカチュアを目にする読者自身が、飢えてはいないことが前提となっており、痩せ衰えた労働者の肉体が読者の消費の対象ともなっているという点である。しばしばこうしたカリカチュア作品に、見るという行為に自意識的に言及した言葉が描き込まれるのは、作品自体が批判的な距離を内在しようとし、描写の対象である非人道的な行為の単なる反復となることを避けようとするためである(181)。また、読者は多くの場合、飢えた労働者の側ではなく食べることのできる側にいる。しかし批判の対象となっているほど飽食しているわけではないし、決してそこに描かれたほどの零落状態には陥りたくないというちょうど中間にあたる位置にいる。その絶妙な立ち位置が、その作品が読者にとってカリカチュアとなるためには重要なのである(182)。

第5章は、2016年に著者がアメリカで発見したRichard ‘Dicky’ Doyle(1824-1883)の未発表のスケッチブックなどから、チャーティスト運動を描いた図像を取り上げている(203)。ヴィジュアルナルポルターージュに遜色なくカリカチュアが運動の実情を描き出すことに成功していたことや、風刺画が現実の中の際立った事象をいかにグロテスクに歪めて誇張しインパクトを生むことを狙ったか、事例を交えながら説明している(201; 203)。

最終章は、イギリス史上ほぼ初めて、即位中に安価な定期刊行物の中に繰り返し戯画化されることとなったヴィクトリア女王のカリカチュアに焦点が当てられる。そうした刊行物の中では女王は時にコミカルなペルソナをかぶせられ、「もう一人の」ヴィクトリアとして登場する(240)。またこうした場では豪華な戴冠式に始まり、巨額のコストを費やした女王の婚約と結婚の金額が計上されて、王室の非神格化に一役買うこととなった(243)。

特に女王の母性や女性性は、カリカチュアの格好の対象となった。当初は悪意のない冗談じみたものが多かったが、やがて王子王女の誕生に新鮮味がなくなり、チャーティスト運動の盛り上がりによって政治に緊張感が高まると、風刺のトーンも辛酸なものになっていく(262)。そのうちの一つが、「二人の母親」と題され1842年に*Odd Fellow*に掲載された図版である。

この絵には左手には家族に囲まれ生まれたての王子を覗き込むヴィクトリア女王が、右手には救貧院の中で瀕死の赤ん坊を膝に抱えた飢えた母親が描かれている。女王と女性は背中合わせに描かれて鏡のような構図になっており、上流階級がグロテスクなドッペルゲンガーに出会っているかのような効果をもたらしている(263)。このようにこの時代の女王を描いたカリカチュアは一般に共有されていた母性的で家庭的なイメージやいわゆる「ヴィクトリア朝的」な価値観を格好の揶揄の対象としたのである。

さて、本書が取り上げてきた反支配勢力という強いメッセージ性を持った風刺の隆盛は1840年代半ばには終わりを告げる。著者によればミドルクラスを読者層とした『パンチ』とは異なるこの時期の急進的なカリカチュア作品群はもっと評価されて然るべきであり、まだまだ調査と議論の余地のある分野と言える。

上記から伝わるかとは思いますが、著者はやはりSeymourを中心にカリカチュアの変革期を議論した第2章、さらにこれまであまり評価されてこなかったGrantに光を当てた第3章の執筆にもっとも力が入っているように見受けられる。紙数の都合上、本稿では図版の掲載ができなかったが、本書の魅力はやはり知識と経験の豊富な著者によるヴィジュアルな素材の丁寧な読み解きである。カラー図版も多いので、興味をもたれた方はぜひ一読をおすすめしたい。

Bibliography

Haywood, Ian. *Romanticism and Caricature*. Cambridge University Press, 2013.
---. "The Literature of Chartism." *The Oxford Handbook of Victorian Literary Culture*, edited by Juliet John, Oxford University Press, 2019, pp. 83-102.